

八千代市赤作遺跡

— 八千代警察署米本交番建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和4年11月

千葉県教育委員会

や ち よ し あ か さ く い せ き
八千代市赤作遺跡

－八千代警察署米本交番建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書－



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第43集として、米本交番建替事業に伴って実施した赤作遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、中・近世の道路と考えられる溝状遺構が検出されました。遺跡の周囲には、米本城などの城館跡が知られており、この地域の中・近世の様相を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和4年11月

千葉県教育委員会
文化財課長 金井 一喜

凡 例

- 1 本書は、千葉県警察本部総務部会計課による八千代警察署米本交番建替事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
赤作遺跡 八千代市米本1951（遺跡コード221-039）
- 3 千葉県警察本部の依頼を受け、発掘調査及び報告書作成に至る整理作業を令和3年度及び4年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下の通りである。
令和3年度
千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財課長 田中 文昭 副課長 高梨 俊夫
発掘調査班長 吉野 健一
担当者 文化財主事 小澤 政彦
実施 期 間 令和3年12月1日～12月13日
令和4年度
千葉県教育庁教育振興部文化財課
文化財課長 金井 一喜 副課長 四柳 隆
発掘調査班長 黒沢 崇
担当者 主任上席文化財主事 蜂屋 孝之
- 5 本書の執筆は小澤政彦が、編集は蜂屋孝之が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県警察本部、公益財団法人千葉県教育振興財団、八千代市教育委員会、八千代市郷土博物館ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 第8図の米本村絵図の模式図は、八千代市郷土博物館所蔵「米本村絵図」をもとに、(財)千葉県文化財センター1999年「一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書1」第53図として作図、掲載された模式図である。八千代市郷土博物館の協力を得て、一部加筆・修正している。
- 8 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 9 本書で使用した地形図は下記の通りである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「小林」、「白井」、「習志野」、「佐倉」平成22年
第3図 八千代市発行 1/2,500 八千代市地形図
第7図 地図史料編纂会編 明治前期 関東平野地誌図集成 1/25,000 迅速測図「小林」、「白井」、「習志野」、「佐倉」
- 10 写真図版1の航空写真は京業測量株式会社による昭和48年撮影の写真を使用した。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査に至る経緯と経過	1
2	調査の方法と概要	1
第2節	遺跡の位置と環境	1
第3節	基本土層	4
第2章	調査の成果	6
第1節	概要	6
第2節	検出された遺構と遺物	6
1	溝状遺構	6
2	出土遺物	10
第3章	総括	11

挿図目次

第1図	赤作遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第5図	SD-001A～C・SD-002A～C・SD-003	8
第2図	基本土層	4	第6図	出土遺物	10
第3図	周辺地形と調査区	5	第7図	遺跡の位置(迅速測図)	12
第4図	確認トレンチ・グリッド配置図	7	第8図	米本村絵図の模式図	13

表目次

第1表	周辺の中・近世遺跡一覧	2
-----	-------------	---

図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真	図版3	SD-002A・B SD-003 調査風景
図版2	T1 T2 基本土層 SD-001A～C SD-002A～C		縄文時代遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯と経過

八千代市米本に所在する八千代警察署米本交番は、交通量の多い国道16号沿いに位置している。この周辺には小学校等の教育施設も多く、米本交番は地域の治安や安全を守ってきた。交番の建設からすでに多くの年月を経ており、建物の老朽化が進んだため、交番建替事業が計画された。

この事業計画の実施に当たり、関係機関と協議を行った。工事をを行う範囲は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内にあり、千葉県教育委員会は、取り扱いを決定するため、令和3年3月に試掘を行った。試掘の結果、遺構が検出され事業地内に遺構が広がることが予想された。これを受けて、関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、今回は千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は調査対象面積163.8㎡に対して令和3年12月1日に開始し、令和3年12月13日に現場作業を終了した。令和4年7月1日から7月29日まで整理作業を実施した。

2 調査の方法と概要

発掘調査 調査対象の遺跡は、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代、中世の包蔵地である。発掘調査にあたっては、1A (X=-28.060, Y=25.940) を起点として、20m×20mの大グリッドを設定し、この大グリッド内を2m×2mの小グリッドに分割している。

縄文時代以降の調査については、重機によりトレンチ調査を行った。その結果、中・近世の溝状遺構7条を検出した。旧石器時代の調査については、調査対象面積の2%の確認調査を行った。調査は、2×2mのグリッドを1か所設定し行った。遺物が検出されなかったため、確認調査で終了した。調査終了後、調査区内を重機で埋め戻し、現場作業を終えた。

記録作成は、トレンチ・遺構平面図については、平板測量を用い、断面図、遺物出土状況についても手実測により行った。写真撮影はデジタルカメラ (Raw・JPEGデータ) により実施した。

整理作業 現場発掘作業終了後、調査図面・写真の記録整理、遺物の整理作業を行った。その後、現場図面を鉛筆トレース・修正を行い、トレース原因を作成した。併行して遺物は、水洗・注記・分類を行った上で、掲載するものを選抜し、実測、拓本、写真撮影を行った。遺構・遺物の挿図、写真図版は、デジタルによりトレース、補正、編集を行い作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、報告書刊行に至った。また、報告書編集集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第2節 遺跡の位置と環境 (第1・3図、図版1)

本遺跡が所在する八千代市は、千葉県の北西部に位置している。市の東は佐倉市、西は船橋市と習志野市、南は千葉市、北は白井市と印西市と接している。八千代市域は、海成砂層の下総層群を基盤層とする北総台地と呼ばれる地域にあって、遺跡が立地する台地の層厚は、洪積世に堆積した下総層群の金剛地層などが下部層を構成し、木下層などの成田層群が上部層を構成している。また、さらにその上には関東ロー

層と呼ばれる下末吉ローム層・武蔵野ローム層・立川ローム層などの火山灰層が堆積している。

本遺跡が立地する台地の地形は、印旛沼から入り込む高野川(こうやがわ)と西側は印旛沼につながる新川に囲まれた標高約25mの平坦な広い台地を呈している。本遺跡の東側に位置する現在の新川には、阿蘇沼と呼ばれる沼が存在しており、遺跡近隣にその名を留めている。遺跡内を通る国道16号線は、千葉県の大動脈として機能しており、その国道と南北に交差する道路が、千葉県主要地方道千葉竜ヶ崎線である。現在は旧道となっているが、かつてはその主要道の交差点にあっており、街道筋のこれまでの経緯を探る上では、興味深い調査といえる。

今回の調査で検出された遺構が、すべて中・近世であることから、周辺遺跡の概観も中・近世の遺跡に限定して行う。本遺跡周辺の中・近世遺跡の一覧を第1表にまとめた。また周辺遺跡の概観は、(財)千葉県文化財センター^(注1)による報告と千葉県教育委員会^(注2)による報告に評述されているので、あわせて参照されたい。

今回報告する赤作遺跡は、過去3度の調査が行われている。昭和56年度に阿蘇中学校校舎増築に伴う確認調査が八千代市教育委員会により行われ、縄文時代の遺物が出土している。この調査で中・近世の遺構、遺物が出土したかどうかは不明である。平成9年度には一般国道296号道路改築事業に伴い、(財)千葉県文化財センターが調査を実施している^(注1)。この地点では、中・近世の溝状遺構、道路跡、土壌墓群が検出され、遺物もまとまって出土している。出土遺物は、15世紀後半～16世紀前半と18世紀後半が主体である。これと同一事業で、平成11・12・14・16年度にも発掘調査が実施されており、溝状遺構と土坑が検出されている^(注2)。出土遺物は15世紀後半～16世紀前半までのものが主体を占めている。

本遺跡の周辺には、米本城跡(2)、飯綱砦跡(7)、正覚院館跡(16)、島田城跡(24)、先崎城跡(39)など、中世の城館跡が点在している。このうち米本城は、4つの主要な曲輪と3条の空堀からなる城郭であった。

本遺跡に隣接する地域の小字に内宿という地名が残っており、本遺跡の周辺が中世城下集落域にあつている可能性も指摘されている^(注1,3)。また八千代市内で最も板碑が見つまっているのが米本地区である

第1表 周辺の中・近世遺跡一覧

No.	遺跡名	内容	文献	No.	遺跡名	内容	文献
1	赤作遺跡		注1, 注2	20	妻九台第2塚群	塚2基	
2	米本城	高輪遺郭式、土橋、櫓台、虎口、土塁、空堀・土塀跡	注4, 注5	21	金塚所在塚	塚	注8
3	米本塚	塚1基		22	大日原塚群	塚6基	
4	村上高野原塚群	塚7基		23	柳野神社群集塚	塚9基	
5	宝喜作台入定塚	古墳・塚、古墳再利用、入定伝承あり		24	島田城跡	城館跡	
6	七百金所神社塚	塚、円形1基		25	島田塚群	塚7基	
7	飯綱砦跡	砦跡、副都雑形山砦		26	逆水塚群	塚2基	
8	上高野相野庚申塚	塚・石塔石仏(庚申塔)		27	逆水北塚群	塚2基	
9	阿蘇中学校校裏遺跡	土坑23、溝2基		28	雷遺跡	中・近世土坑2、ビット群1群、注9溝3、道路状遺構1	
10	殿台遺跡	城館(井戸跡)・土塀跡(土塀器)石器	注6	29	神野新山塚群	塚6基	
11	井野西谷津1号墳	塚、庚申塚、方形(5×14m)		30	神野群集塚	塚38基	
12	井野南作1号墳	塚、梵天塚、方形(8×5m)		31	新戸1号塚	塚	
13	井野遺跡	塚、堀、溝(溝状遺構)		32	小台塚	円形塚	
14	湯山神社跡	塚敷跡、郭、土塁(消滅)	注7	33	岩谷塚群	方形塚5基	
15	村上第2塚群	塚		34	下高野庚申塚	塚1基	
16	持田遺跡	中世廻廊跡1条、ビット30基、溝4条、陶磁器、板碑、梵天元宝、金銅製瓦板等	注6	35	大久保三山塚	方形塚2基、三山碑	
17	唐塚第1塚群	塚3基		36	先崎西原1号墳	梵天塚、出羽三山石碑	
18	唐塚第2塚群	塚2基		37	先崎宮ノ越遺跡	石塔石仏(板碑)	
19	妻九台塚群	塚2基		38	先崎宮ノ越1号墳	塚	
				39	先崎城跡	城館跡、多郭構造、虎口、櫓台、土塁、空堀	
				40	先崎宮ノ越2号墳	塚	

ことなどからも、中世におけるこの地域の重要性をうかがい知ることができる。

本遺跡の周辺には阿蘇中学校東側遺跡(9)や雷遺跡(28)が存在する。隣接する阿蘇中学校東側遺跡では、土坑群や溝跡が検出されている。また雷遺跡では道路状遺構、溝状遺構、土坑、ピット群などが検出されている。雷遺跡の所在地の字名に「下宿」とあることから、主要街道の宿やその関連施設の存在を示している可能性がある。

本遺跡の周辺には中・近世の塚も多く確認されている。本遺跡の南側に近接する地域には、米本塚(3)、村上新山塚群(4)、新川を挟んで西側には、大日前塚群(22)、熊野神社群集塚(23)などが所在する。また北側には逆水塚群(26)、逆水北塚群(27)、東側には下高野庚申塚(34)、大久保三山塚(35)などが所在している。

第3節 基本土層(第2・4図)

本地点の基本層序として、第4図グリッド1の東壁の土層断面を图示した。

I層(表土層):層厚約60cm。表土層中にはローム土を主体とした盛土が確認され、このため、I層が厚くなっている。

III層:ハードローム層までソフトローム化が進行しており、IV~V層も取り込まれているため、本地点ではIV~V層についてハードロームとしての土層を確認することができなかった。ソフトローム化は部分的にIXa層まで達している。

VI~VII層:A.Tを含む黄褐色のローム層である。VI層とVII層の区分が難しく、一括した層として捉えた。

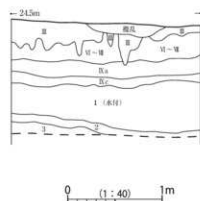
IXa層:第2黒色帯の上部にあたり、上下の層に比べやや暗い色調で、赤色のスコリアを多く含む。

IXc層:IXa層に比べ明るい色調で明瞭に捉えることができる。赤色スコリアは少ないが、黒色スコリアが多いのが特徴的である。

1層:この層より下位の層は水付ローム層である。しまりが弱く、粘性が強い土層で、黒色の粒子を多く含む。IXc~X層の水付ロームと考えられる。

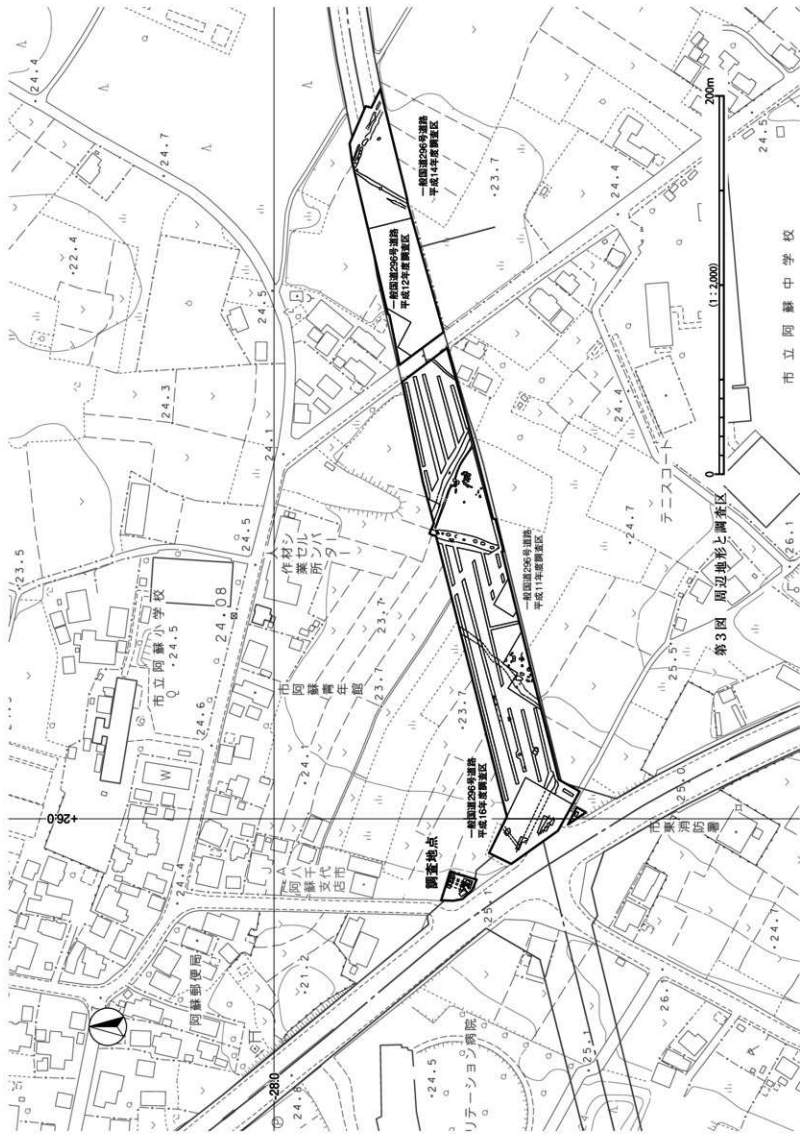
2層:しまり、粘性が強い土層で、褐鉄を主体に含む土層である。黒色粒子も多く含む。

3層:しまりが弱く、粘性が極めて強い土層である。褐鉄を多く含むが、黒色粒子は1・2層より少ない。



- III層: I0Y25.8(黄褐色土)しまり弱い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の黒色スコリア少。
- VI~VII層: I0YR5.6(黄褐色土)しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の赤色スコリア少、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の黒色スコリアやや多、上部に人工を含む。
- IXa層: I0YR4.6(褐色土)しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の赤色スコリア少、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の黒色スコリアやや少、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の白色粒子わずか。
- IXc層: I0YR5.4(近い黄褐色土)しまりやや強い、粘性強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の赤色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の黒色スコリア多、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の白色粒子わずか。
- 1層: I0YR4.0(近い黄褐色土)しまりやや弱い、粘性極強い、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の赤色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の黒色粒子多、X層層に比べ粘性強い。
- 2層: 7.5YR4.6(褐色土)しまりやや強い、粘性強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の黒色粒子やや多、褐色の褐鉄を多く含む。
- 3層: I0YR4.0(近い黄褐色土)しまりやや弱い、粘性極強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の黒色粒子やや少、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の白色粒子わずか、褐色の褐鉄を多く含む。

第2図 基本土層



市立阿蘇中学校

1:2000

周辺地形と調査区

第3図

調査地点

阿蘇市役所

阿蘇青年館

阿蘇市役所

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

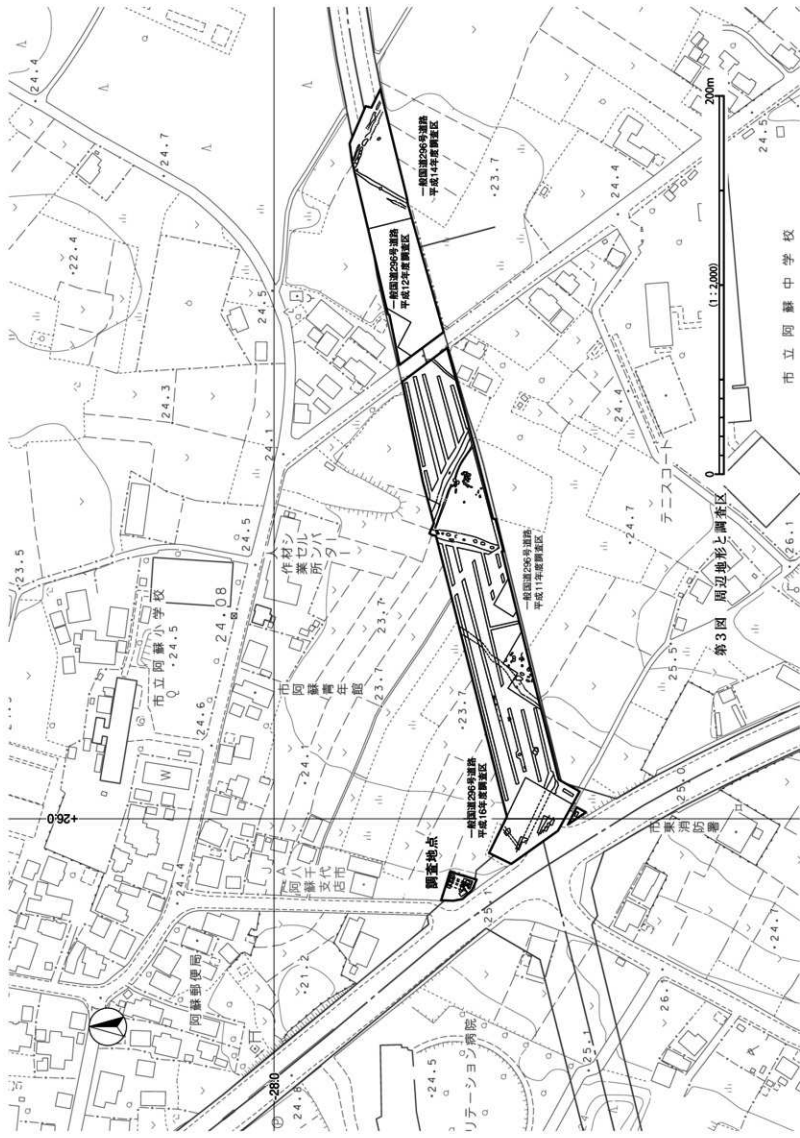
阿蘇市道154号

阿蘇市道154号

280



200m



第2章 調査の成果

第1節 概要

検出された遺構は、中・近世の溝状遺構7条である。遺構はいずれもソフトローム層上面にて検出された。溝状遺構は、1条を除いてすべて南北方向に並行して伸びている。調査時には調査区東側に位置し、硬化面を持つ溝状遺構をSD-001、西側に位置し、硬化面を持たない溝状遺構をSD-002とした。また、どちらの溝も遺構確認の段階では1条の溝と判断されたが、掘り下げた結果、3条の溝が検出されたため、A～Cの枝番号を付けて呼称することとした。トレンチのT1とT2は5.2m離れており、両トレンチ間での溝状遺構の関係性を示すため、破線による推定線を図示した。SD-001・002に直行するように東西方向に伸びる溝状遺構をSD-003とした。トレンチのT3では、溝状遺構の検出はできなかった。

なお、T1トレンチ内で4条の溝を検出したが、トレンチ内の土層断面の観察結果からSD-001AとSD-001Bの間、SD-001B、SD-002Aの間の堆積土層中にも硬化面や硬化したブロックが混入している状況が看取されたことから、図示した以外にも溝が存在していたことが推測される。また、T2トレンチにおいてもT1で検出された以外の別の溝が確認されていることから、数条の溝が重なり合っていることは間違いなく、長期間にわたり何度も溝が掘り返されていることが推測される。

第2節 検出された遺構と遺物

1 溝状遺構（第5図、図版2・3）

SD-001A

2B-64・65・93、3B-02・03・11・12・13・22で検出された。南北方向に伸びる7条の溝状遺構の中で、最も東側に位置している。一部が攪乱を受けている。SD-001Cと重複しており、本遺構の方が新しい。

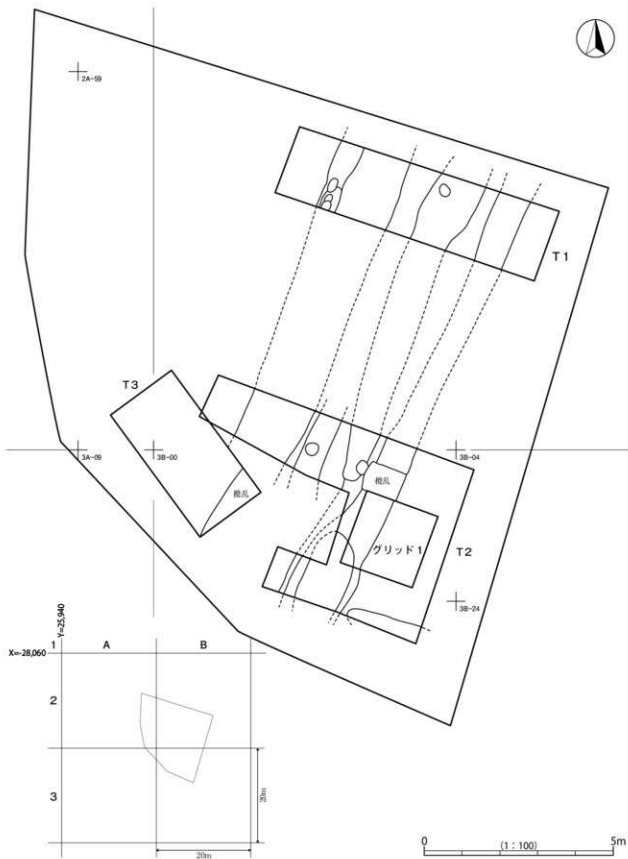
幅0.85mであるが、調査区南側のSD-001Cと重複する部分では、1.85mと広がっている。深さは、トレンチ断面の観察で20cmである。覆土は1層がしまりの弱い黒褐色土、2層はややしまりが強い暗褐色土である。3層は色調など2層に似るが、溝状遺構底面における硬化面である。硬化面は底面全体にわたって認められた。

本遺構の時期を示すような遺物の出土はなかった。

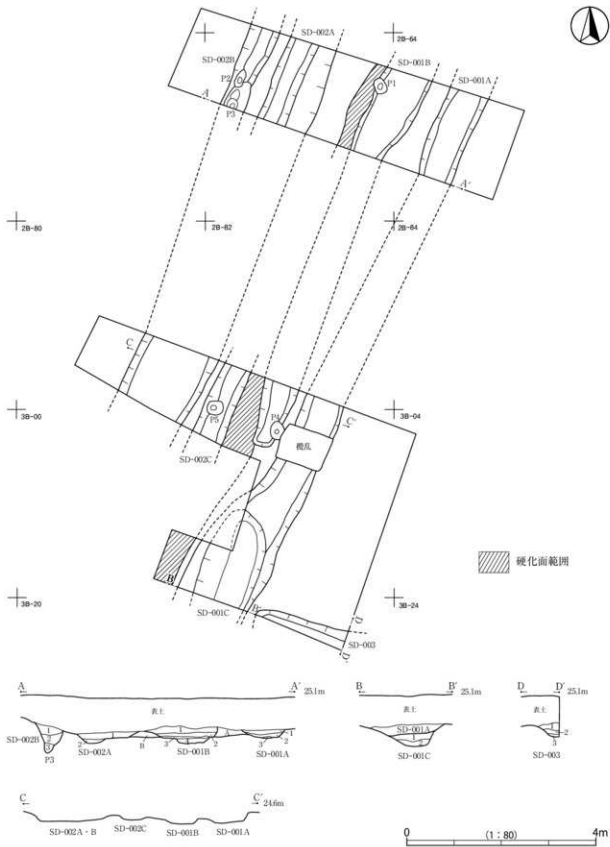
SD-001B

2B-63・64・73・74・92・93、3B-02で検出された。幅は1mであるが、南側に向かって細くなっている、収束する。深さはトレンチ断面の観察で35cmである。覆土は1層がしまりの弱い褐色土、2層がしまりのやや強い黒褐色土である。3層は暗褐色土でしまりが極めて強い。4層は、ローム粒、ロームブロックが多く混入する固くしまった土層である。硬化面が底面全体にわたって認められた。また底面からビットが2基検出された。P1は、長径34cm、短径25cm、深さ7cmである。P4は長径47cm、短径27cm、深さ26cmで、東側の一部は攪乱を受けている。いずれのビットも、本遺構の端部に構築されており、関係性については不明である。

本遺構の時期を示すような遺物の出土はなかった。



第4図 確認トレンチ・グリッド配置図



第5圖 SD-001A~C・SD-002A~C・SD-003

SD-001A

- 1層：10YR2/3（黒褐色土）しまり強い、粘性弱い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽少、 $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ のロームブロックわずか。
2層：10YR3/3（暗褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽少。
3層：10YR3/3（暗褐色土）しまり強い、粘性弱い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多、上面硬化。

SD-001B

- 1層：10YR4/4（褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の炭化灰わずか、 $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ のローム軽多、 $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ のロームブロック多。
2層：10YR2/2（黒褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽多。
3層：10YR3/3（暗褐色土）しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム散在。
4層：10YR3/4（暗褐色土）しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽多、 $\phi 1 \sim 5\text{cm}$ のロームブロック多、上面硬化。

SD-002A

- 1層：10YR2/2（黒褐色土）しまりやや強い、粘性強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多。
2層：10YR3/2（暗褐色土）しまり強い、粘性強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽多。

SD-002B

- 1層：10YR2/2（黒褐色土）しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多、 $\phi 1 \sim 5\text{cm}$ のロームブロックや中多。

P3

- 2層：10YR2/2（黒褐色土）しまり強い、粘性強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽多、 $\phi 1 \sim 6\text{cm}$ のロームブロック多。
3層：10YR2/2（暗褐色土）しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多、 $\phi 1 \sim 4\text{cm}$ のロームブロックや中多、2に比しロームブロック少くなる。
A層：10YR2/2（暗褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の褐色スコリアわずか、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多、 $\phi 1 \sim 4\text{cm}$ のロームブロックや中多。
SD-001A、Bに認められる層である。この層に混入するロームブロックが多いことから、明確に分離可能である。ところどころに硬化面、及び硬化面がブロック状になって認められる。SD-001A、Bに先行する遺構の覆土と考えられる。
B層：10YR3/2（暗褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多、 $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ のロームブロックや中多。
A層に似るが、硬化している部分やブロックは相対的に少ない。

SD-001C

- 1層：10YR2/3（黒褐色土）しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の炭化灰わずか、 $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ のローム軽多、 $\phi 1 \sim 5\text{cm}$ のロームブロックや中多、上面硬化。
2層：10YR3/3（暗褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ のロームブロックや少ない。

SD-003

- 1層：10YR2/3（黒褐色土）しまり強い、粘性強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽少、 $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ のロームブロックわずか。
2層：10YR3/3（暗褐色土）しまりやや強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ のローム軽や中多、ロームブロック少ない。
3層：10YR3/3（暗褐色土）しまり強い、粘性やや強い、 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ の褐色スコリア散在、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ のローム軽や中多、 $\phi 1 \sim 3\text{cm}$ のロームブロックや中多、上面硬化。

SD-001C

3B-12・21で検出されたもので、北側で収束する部分が確認された。SD-001Aと重複しており、本遺構の上面にSD-001Aが構築されていたことから、本遺構の方が古い。最大幅1.5mで、東側は急な立ち上がりであるのに対し、西側は緩やかに立ち上がる。深さは確認面から39cmである。覆土は、1層が極めて固くしまった黒褐色土であり、重複するSD-001Aの影響が認められる。2層は、しまりがやや強い暗褐色土が堆積していた。

SD-002A

2B-62・63・91・92、3B-02で検出された。SD-001Bから硬化範囲を挟んだ西側に位置している。トレンチT 1では幅1.15mで、東側は緩やかに立ち上がり、西側ではやや急な立ち上がりとなる。深さはトレンチ断面の観察で20cmである。覆土は、1層が、しまりのやや弱い暗褐色土、2層はしまりの弱い黒褐色土が堆積していた。トレンチT 2では、SD-002Bと合流し、1条の広い溝幅になっているものと考えられる。遺構配置図の検討から、トレンチT 1で検出されたSD-001A・Bの幅と、トレンチT 2で検出された広い溝状遺構の幅が一致することと、覆土の様相においても大きな変化が認められなかったことから、トレンチT 1・T 2間で合流して広い溝状遺構になっているものと推測される。トレンチT 2の部分では、幅1.68m、深さ18cmである。

本遺構の時期を示すような遺物の出土はなかった。

SD-002B

2B-52・62・91・92、3B-02で検出された。検出された7条の溝状遺構の中で最も西側に位置している。トレンチT 1では幅0.6mで、東側は緩やかに立ち上がり、西側ではやや急な立ち上がりとなる。深さはトレンチ断面の観察で22cmである。覆土は単層で、しまりの弱い黒褐色土が認められた。本遺構内か

らは、ピット2基（P2・P3）が検出された。両遺構は重複関係にあるが、新旧関係は不明である。P2は長さ36cm、短径18cm、深さ31cmである。P3は、形状は不明な部分が多いが、北側にテラス状の平坦面を持ち、南側はさらに深く掘りこまれている。テラス部分の深さは22cm、一番深く掘りこまれている部分の深さは32cmである。P3は、トレンチ断面でSD-002Bとの前後関係が観察できた。断面の観察からP3が埋没した後に、SD-002が埋没したと判断した。P3の覆土上層は、しまりが極めて弱いことから、P3の埋没とSD-002の埋没に大きな時間差はないと捉えるのが自然であろう。以上のことからP3はSD-002Bの付帯施設として機能していた可能性が高い。P2も同様の可能性が高いと考えられる。上述したように、トレンチT2では、SD-001Aと合流しているものと考えられる。

本遺構の時期を示すような遺物の出土はなかった。

SD-002C

2B-91・92で検出された。当初、トレンチT1で検出されたSD-002Aの続きの部分として捉えていたが、形状が大きく異なることや遺構配置図の検討から、別のものとして捉え、新たにSD-002Cと呼称することとしたものである。このことから本遺構は、トレンチT1・T2間に収束する部分があるものと考えられる。幅0.65m、深さは確認面から12cmである。溝内からはP5の小ピット1基が検出された。深さは30cmである。

本遺構の時期を示すような遺物の出土はなかった。

SD-003

3B-22・23で検出された。東西方向に伸びる溝状遺構である。北側の立ち上がりのみが検出され、南側は調査区外のため、幅は不明である。深さはトレンチ断面の観察で28cmである。覆土のうち、3層がしまりが極めて強い暗褐色土が堆積していた。SD-001Aに近接する部分で溝幅が収束し、浅いになっていく。

本遺構の時期を示すような遺物の出土はなかった。

2 出土遺物（第6図、図版3）

遺物は、縄文時代の土器・石器、中・近世の陶器が出土しているが、いずれも微量で、小破片である。主に溝状遺構の覆土から出土している。

第6図1は縄文時代中期初頭の土器で、底部破片である。底がやや張り出す器形で、半截竹管による複数の平行沈線が格子目状に引かれている。2は加曾利B式の粗線文土器の胴部破片と考えられる。横位の隆線が貼付けられ、押捺がなされている。器厚は薄い。3は表面採集したもので、器面はかなり傷つき、摩耗も進んでいる。斜行する沈線が複数認められることから、加曾利B式の粗製土器の可能性が高い。図化しえなかったが、写真図版3で掲載したものについて、説明する。図版3に掲載した縄文時代石器の4は、T2出土の砂岩の磨石片である。1か所に凹みが認められる。重量は38.95gである。



第6図 出土遺物

第3章 総括

今回の調査では、163.8㎡という狭小な調査範囲ではあったが、中・近世の溝状遺構7条を検出し、また縄文時代の土器、石器、中・近世の陶器やカワラケ、土師質土器が出土した。以下、時代ごとに記述を行う。

縄文時代

遺構は検出されなかったが、土器と石器が微量出土した。土器については、中期初頭の土器と、後期中葉の加曾利B式が出土した。過去の調査でも、前期後葉から末葉、後期前葉から中葉にかけての土器の出土が報告^(註1・2)されており、今回の調査結果と符合する。

前期末葉から中期初頭の時期について、本調査地点に近接する調査区で、土坑から前期末葉の顔面表現付の土器が出土しており、注目される。今回の調査では中期初頭の土器片が出土したのみであったが、今後、周辺で調査が行われれば、当該期の集落跡が見つかる可能性も、十分に考えられる。

後期中葉の時期には、本遺跡の北側に神野貝塚と佐山貝塚、東側には井野長割遺跡という大規模な遺跡が存在する。本遺跡もこれらの大規模な遺跡と関連する可能性も考えられる。

中・近世

今回の調査では、溝状遺構7条が検出された。この内、6条は南北方向に並行して構築されていた。東側に位置し硬化面を持つSD-001と、西側に位置し硬化面を持たないSD-002は、並行して構築されていることから、道路状遺構として同時に機能していたと考えられる。SD-001A・Bの底面及びその周辺には硬化面が認められた。またSD-001、SD-002に切られる溝状遺構間の土層は、硬化面や硬化したブロックを含む層であったことから、遺構確認を掘りこまない道路状遺構の痕跡と考えられる。これらに加え、溝状遺構が同じ方向に何重にも構築されていることから、長期間にわたって使用されたと考えられる。長期間の使用の中で幾度も改修が行われたと考えられ、溝状遺構が途中で途切れることや、溝状遺構同士の重複が認められるのは、こうした改修の痕跡が累積したものと考えられる。

SD-003は、SD-001・002に直行するように東西に伸びている。大半が調査区外に伸びているため、詳細な検討はできないが、この遺構の覆土下層が固くしまっていることから、道路状遺構と考えられる。

これら道路状遺構について、南北に走るものは、第7図の迅速測図の線で囲んだ範囲で確認することができる道の可能性が高い。この道は、村上村と米本村を南北につなぐ村上村道である。近世の米本村は、常陸から上総へ向かう街道筋にあたっており、人や荷物の往来も多く、馬糞場となっていた^(註10)。今回検出された道路状遺構も人馬が多く交通した街道に関連した遺構として捉えることができるだろう。また天保7(1836)年に作成されたと考えられている米本村絵図(第8図)^(註11・12)においては、道沿いに家が立ち並ぶ村の様相が描かれており、この集落と村上村とを結ぶ道が記されている。今回の調査で検出された道路状遺構と関連する可能性が高いと考えられる。

調査地点は、現在一部旧道となっている主要地方道千葉竜ヶ崎線のかつての道路に面する地点で、国道16号と交わる主要幹線の交差点にもあっており、中・近世以降の道路状況を反映した遺構群が検出された点で、興味深い調査成果といえる。



第7図 遺跡の位置(迅速測図)

注

- 1 (財)千葉県文化財センター 1999「一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書1-八千代市赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡」千葉県文化財センター調査報告第360集
- 2 千葉県教育委員会 2016「八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡・平沢遺跡・赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第15集
- 3 八千代市史編さん委員会 1978「第3章中世」[八千代市の歴史]
- 4 八千代市教育委員会・八千代市中世館城址調査団 1976「八千代市中世館城址調査報告書」
- 5 八千代市教育委員会 2021「千葉県八千代市米本城跡b地点—共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 6 八千代市教育委員会 1995「平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報」
- 7 上高野原古墳発掘調査団・八千代市教育委員会 1974「千葉県八千代市村上供養塚発掘調査報告書」
- 8 八千代市教育委員会 2002「千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書」
- 9 (財)千葉県文化財センター 2004「主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書-八千代市常道跡・雷南道跡-」
- 10 八千代市史編さん委員会 2008「八千代市の歴史 通史編 上」
- 11 八千代市歴史民俗資料館 1997「再発見八千代-米本村絵図を歩く-」
- 12 八千代市歴史民俗資料館 1997「絵図に見るムラ」



赤作道路



T1 (東から)



T2 (南東から)



基本土層



SD-001A・B (南から)



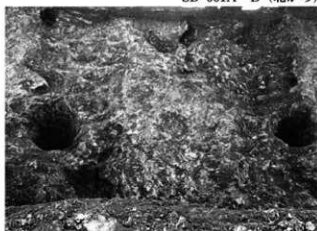
SD-002A・B (南から)



SD-001A・B (北から)



SD-001C (北から)



SD-001B・002C (南から)



SD-002A・B (南から)



SD-003 (西から)



調査風景 1



調査風景 2



縄文時代遺物

報告書抄録

ふりがな	やちよしあかさくいせき							
書名	八千代市赤作遺跡							
巻次								
副書名	八千代警察署米本交番建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	小澤 政彦 蜂屋 孝之							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2022年11月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかさくいせき 赤作遺跡	やちよしあかさく 八千代市米本1951	12221	039	35度 44分 46秒	140度 7分 13秒	20211201 ~ 20211213	163.8㎡	交番建替事業
				世界測地系 WGS84				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
赤作遺跡	集落	中・近世	溝状遺構7条		縄文時代土器、石器			
要約	<p>中・近世の溝状遺構7条を検出した。この内、南北方向に並行して伸びる6条は、一部に硬化面を持つものが認められたことから、道路状遺構と考えられ、近世の米本村を通る街道に関連する遺構の可能性がある。</p> <p>縄文時代の遺構は検出されなかったが、中期初頭と後期中葉の遺物が出土した。</p>							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第43集

八千代市赤作遺跡

—八千代警察署米本交番建替事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和4年11月15日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町1-1

印刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397

